

## P2-020

## 健康障害をもつ子どもと家族のレジリエンスに関する文献検討

—小児がんの子どもと家族に焦点を当てて—

淵田 明子<sup>1)</sup>、河上 智香<sup>2)</sup>、天野 里奈<sup>2)</sup>、小川 純子<sup>3)</sup>、伊藤 茂理<sup>4)</sup>、大堀 美樹<sup>5)</sup>、今江 沙織<sup>6)</sup>、石原 奈未子<sup>6)</sup>、出野 慶子<sup>2)</sup>、大橋 一友<sup>7)</sup>

東海大学医療技術短期大学 看護学科<sup>1)</sup>、東邦大学 看護学部<sup>2)</sup>、淑徳大学 看護栄養学部<sup>3)</sup>、東邦大学 健康科学部<sup>4)</sup>、東京医療保健大学 医療保健学部<sup>5)</sup>、東邦大学医療センター 大森病院<sup>6)</sup>、大阪大学大学院医学系研究科 保健学専攻<sup>7)</sup>

## 【目的】

小児がんの闘病経験のある子どもとその家族のレジリエンスに関する研究の現状を明らかにする。

## 【方法】

1999～2019年の文献について医学中央雑誌WEB版(Ver.5)とCi N iiを使用し、「小児がん」「腫瘍」「子ども」「レジリエンス」をキーワードとして検索し、原著論文、研究報告を分析対象とした。分析項目は、発行年、対象者、研究デザイン、調査内容とした。

## 【結果】

14件が該当し、対象文献は4件であった。発行年は2002年、2013年、2014年、2018年各1件で、研究対象は親1件、小児がん経験者(6～42歳)3件であった。研究デザインは全て横断研究であり、調査用紙、レジリエンス尺度、質問紙による面接を用いた調査研究、内容分析、面接法を用いたGTAで分析されていた。調査内容は、親を焦点とした研究では「親の心的外傷後成長を構成する要素」「慢性疾患をもつ子どもの親との比較による特徴や共通点」、小児がん経験者を焦点とした研究では「レジリエンス変化と外的環境の関連」「病気体験におけるレジリエンスの構造」「闘病体験とレジリエンスの関連」であった。子どものレジリエンスを高めるには、治療過程における家族や友人との関わり、外来通院中の父親の関わり、医師からの理解、子どもの居場所を作ることが有用であった。親については、家族システムの安定化を図ること、父親の有する対社会的志向の支持が有用であった。

## 【考察】

文献では、小児がん経験者は6歳以上が対象であり、自己の体験を振り返り、表現できる年齢であった。治療の全過程を通じて両親の関わりが重要であり、外来通院中は特に父親の関わりが影響を与えることから、人的環境の調整を視野に入れたレジリエンス促進方法を検討する必要がある。また、学童後期以降に発症した子どもは、家族以外の他者からのサポート不足や将来設計の変更に伴うアイデンティティの混乱によってレジリエンスが低下するとされており、子どもの発達段階を考慮した対応が求められる。そして、親のレジリエンス促進には、家族システムの安定化が重要であり、家族の強みや努力に目を向けて関係を深化させるための働きかけが求められる。父親は、対社会的な志向や行動に向かうことでレジリエンスを促進させると考えられ、周囲からの十分な理解や支援を受けられる体制の構築が必要である。

本研究はJSPS 科研費 17K12374 の助成を受けて実施した。

## P2-021

## 小児病院および小児科病棟におけるピアサポート活動の必要性と意義

下村 美紀、本田 睦子、福島 慎吾

認定NPO法人 難病のこども支援全国ネットワーク

【目的】 現在当会では「国立成育医療研究センター」「神奈川県立こども医療センター」「東京都立小児総合医療センター」「埼玉県立小児医療センター」の4つの小児専門病院と、「慶應義塾大学病院」の小児科病棟にてピアサポート活動を行っている。これまでにあった相談について内容を分析し、その役割と今後のあり方を検討する。当会でやっているピアサポート活動は、病気や障害の種別を超えて、体験的知識に根差した共感をベースとし、支援を必要とする人たちの話を傾聴し、悲壮感、孤独感や閉塞感、時には罪悪感からの解放のプロセスに寄り添い、その親が自らの問題を解決する力をもつことが目的である。

【方法】 5カ所の拠点の相談記録を元に相談内容について分析を行う。拠点によって開設年数が異なり、継続年数も様々であるが、今回の分析においては2013年度～2018年度集計より実施した。各拠点の開設時期は以下の通りである。国立成育医療研究センター／2005年3月、神奈川県立こども医療センター／2006年1月、東京都立小児総合医療センター／2012年6月、埼玉県立小児医療センター／2014年1月、慶應義塾大学病院／2017年2月。

【結果】 ピアサポート拠点新設に伴い、当会のピアサポート活動全体における相談件数の増加は顕著である。相談内容については「話を聴いてもらいたい」の項目について需要が高いことが分析される。小児の難病や慢性疾患においては希少なものが多く、時代背景として少子化や出産の高齢化により相談に訪れる年齢層も幅広くなってきてはいるものの、若い親(経験の浅い親)への精神的負担は計り知れない。相談者の状況は様々である。しかしながら病気や障害のある子どもを育てたことがある経験という点での「ピア(なかま)」が「共感と分かち合い」の気持ちで寄り添うことにより、相談者の問題解決への自己決定の後押しを行うことができる。

【考察】 小児専門病院および小児科病棟におけるピアサポートとしての重要な役割として、入院中や診断後にすぐに気軽に立ち寄れるピアサポート窓口であることがあげられる。医療者との連携を行うことにより、多職種で相談者を支えることができる。また、大変な時期を経験したピアを身近に感じてもらうことで相談者のエンパワーメントを高め、将来のピアサポーターとなることを期待する。